

特集1

H. G. ウェルズの『宇宙戦争』と ネイチャーの記事

～A Strange Light on Mars, Nature, (02 August 1894)～

三品利郎（月惑星研究会）

1. H. G. ウェルズの『宇宙戦争』

H.G.ウェルズの『宇宙戦争』は、1898年に出版された「火星からロンドンが侵略を受ける」という筋書きの小説であり、2005年にはスピルバーグ監督が『宇宙戦争』を現代のアメリカに舞台を置き換えて映画化した。また、『宇宙戦争』の舞台をニューヨークにした脚本で、1938年10月30日の夜にCBSラジオのマーキュリー劇場でラジオドラマが放送された。すると、ドラマを実際の事件だと信じた人が全米の各地でパニックを巻き起こしたといわれている。

イギリスのH.G.ウェルズ（ハーバート・ジョージ・ウェルズ、1866～1946）と同時代には、「シャーロック・ホームズ」シリーズのアーサー・コナン・ドイル（1859～1930）、『海底二万里』や『月世界へ行く』などのジュール・ヴェルヌ（1828～1904）、そして、「アルセーヌ・ルパン」シリーズのモーリス・ルブラン（1864-1941）がいる。

H.G.ウェルズは『宇宙戦争』のほか、『透明人間』、『タイムマシン』などの科学小説など多数の著作を残している。

2. ネイチャー、1894年8月2日号の記事

H.G.ウェルズの『宇宙戦争』の第一部の「1開戦の前夜」に、ネイチャー1894年8月2日号の記事が紹介されている。

「一八九四年に火星が地球に接近したとき、火星表面の明るい部分に大きな光点が観測された。

最初にアメリカのリック天文台が・・・・・・

続いて南フランスのニース天文台でペロタン（フランスの天文学者、一八四五～一九〇四、ただし、実際に光点を観測した人物は別人とされる）が、目撃し、さらに次々と数多くの天文学者が確認した。イギリスの天文ファンも、八月二日付けの〈ネイチャー〉誌でそのニュースを知った。いま考えれば、このまばゆい光点は、火星人がロケットを発射した徴だとわかる。」[1]

1894年当時は、リック天文台の36インチ（91.44cm）屈折望遠鏡（ジェームズ・リック望遠鏡）が世界最大の屈折望遠鏡だった。ニース天文台の30インチ（76cm）の望遠鏡は第2位の口径だった。火星面に不思議な光点が世界第1位と第2位の望遠鏡を用いて観測されたとののである。

このネイチャーの記事について、東京創元社版『宇宙戦争』の記者の中村融氏が、解説で「一八九四年には『火星上に怪光が目撃された』という内容の記事を科学誌〈ネイチャー〉八月二日号で読んで、大いに想像力をかきたてられたようだ」[2]と述べている。

すなわち、ネイチャーの記事は作り話ではなく実際にそのような記事が掲載されており、H.G.ウェルズが、そのネイチャーの記事に触発されて『宇宙戦争』の構想を練ったというのである。

その「火星上に光点が目撃された」[3]との記事は、ネイチャーのWEBで公開されている（図1）。

nature

Explore our content | Journal information

nature > editorials > article

Published: 02 August 1894

A Strange Light on Mars

Nature 50, 319(1894) | Cite this article

546 Accesses | 0 Altmetric | Metrics

Abstract

SINCE the arrangements for circulating telegraphic information on astronomical subjects was inaugurated, Dr. Krueger, who is in charge of the Central Bureau at Kiel, certainly has not favoured his correspondents with a stranger telegram than the one which he flashed over the world on Monday afternoon:—

Rights and permissions

Reprints and Permissions

About this article

Cite this article

A Strange Light on Mars. Nature 50, 319 (1894). <https://doi.org/10.1038/050319c0>

Download citation

図1 ネイチャーの記事 [3]

斜体部分は要約であるが、遠まわしに、火星人が信号を送ってきたと示唆している[3]。

火星の奇妙な光

- ・7月16-28日にニース天文台で火星のかけ際の南に光る隆起が観測された。
- ・惑星自体からその光が発せられたのであれば、物理的なものか、人工的なものか、何らかの起源がなければならない。
- ・それで、火星人が私たちに信号を送っているという古い考えが想起される。
- ・物理的な起源としては、広い範囲で燃えるオーロラ(ありえないだろう)、雪を頂く高い丘、あるいは山火事が考えられる。
- ・火星は明け方の空に見える。そして火星面には太陽に光が当たらず少し欠けたところがあるので、地球に信号を送るのにちょうどよい。

3. E. S. ホールデンによる批判

ネイチャーの記事について、リック天文台のE.S.ホールデンが、“Publication of the Astronomical Society of Pacific(PASP)”誌で

IOPscience | Journals | Books | Publishing Support | Login

Publications of the Astronomical Society of the Pacific

BRIGHT PROJECTIONS AT THE TERMINATOR OF MARS

E. S. Holden

© 1894. The Astronomical Society of the Pacific. All rights reserved. Printed in U.S.A.

Publications of the Astronomical Society of the Pacific Volume 6, Number 38

Citation E. S. Holden 1894 PASP 6 285

Article PDF

Hide article information

DOI

<https://doi.org/10.1086/120878>

図2 ホールデンの論文[4]

「火星の明暗境界(terminator)における明るい突起(Projections)」[4]と題して(図2)批判している。これもインターネットに公開されている。

要旨は、以下である。

---1894年8月2日のNatureに掲載された無署名の記事(319ページ)の筆者は、火星の明暗境界に明るい突起(prominences)が見られるという事実を、7月28日にニース天文台で観測されたという報告をAstronomische Nachrichten, No.3245の記事で初めて知ったようです。もし彼が1ヶ月前のAstronomische Nachrichten, No.3241を見ていたら、6月28日にリック天文台で観測したという記述を読んでいたかもしれない。本誌のキャンベル教授の論文では、このような出現の変遷のすべてが、この時代の火星観測者にはかなり知られていたと思われる。

火星での明るい隆起(prominences)には2種類ある。一つは、明るい極冠として知られている。もう一つは、明暗境界に明るい突起である。最新のSchaeberle教授やCampbell教授などによる観測では、これらの突起は、明暗境界を横切って横たわる山脈によって引き起こされていると考えられている。

ネイチャー誌に掲載された記事の著者は、明らかにこのテーマの文献に精通していない。彼は“A Strange Light on Mars”という印象的なタイトルで紹介されている。しかし、先に引用したキャンベル教授の論文を読んだ人にとっては、これらの隆起が火星からの光信号であるという提案は、まったくとんでもないことなのである---

本誌 Vol.VI (103 ページ) のキャンベル教授の論文 The Publications of the Astronomical Society of the Pacific, Vol.VI(103 ページ)とは、“AN EXPLANATION OF THE BRIGHT PROJECTIONS OBSERVED ON TERMINATOR OF MARS” (図3)のことである[5]。このレポートには、火星の欠け際に現れた明るい突起について 1888 年にスキヤッパレリが観測したことから 1894 年のリック天文台での観測まで整理され考察されている。

IOPscience Journals Books Publishing Support Login
Publications of the Astronomical Society of the Pacific

AN EXPLANATION OF THE BRIGHT PROJECTIONS OBSERVED ON THE TERMINATOR OF MARS

W. W. Campbell
© 1894. The Astronomical Society of the Pacific. All rights reserved. Printed in U.S.A.
Publications of the Astronomical Society of the Pacific Volume 6 Number 35
Citation W. W. Campbell 1894 PASP 6 103

Article PDF

Hide article information

DOI
<https://doi.org/10.1086/120795>

図3 キャンベルの論文[5]

ネイチャーの記事を書いたライターは、論文の読み方が浅く、引用文献まで詳しく読み込んでいないと、E.S.ホールデンが批判したのである。

なお、明るい突起 (Bright projection) は、白い雲であることが判明している。 E.M.アントニアジは、1930 年に出版した “La

planète Mars” で、「火星のターミネーターに沿って見られる白または黄色の一時的な突起は常に同じ場所で生成されるとは限らない。従って、それらは山ではなく雲によるものでなければならない。」[6]と述べている。

(注)原著はフランス語だが、1975 年に出版された英訳版を引用した。

4. リック天文台での火星スケッチ

「火星のターミネーターにおける明るい突起」[4]には、図4のリック天文台でのスケッチが掲載されている。

図4の6枚のうち、左の列の中央のスケッチ部分を拡大したものが図5である。図5のCと記号が書かれた箇所には、盛り上がり突起状に描かれた模様がある。

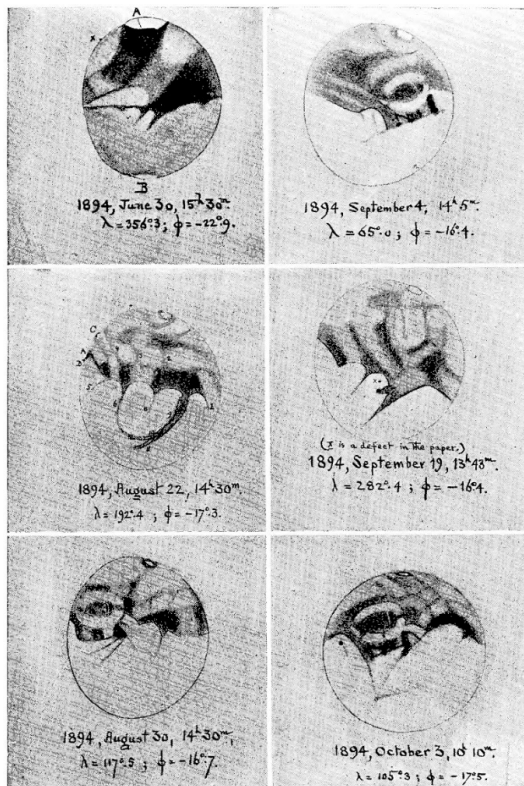


Plate H₁₁.
MARS, 1894.
By Professor EDWARD S. HCLDEN; Lick Observatory.

図4 リック天文台でのスケッチ[4]

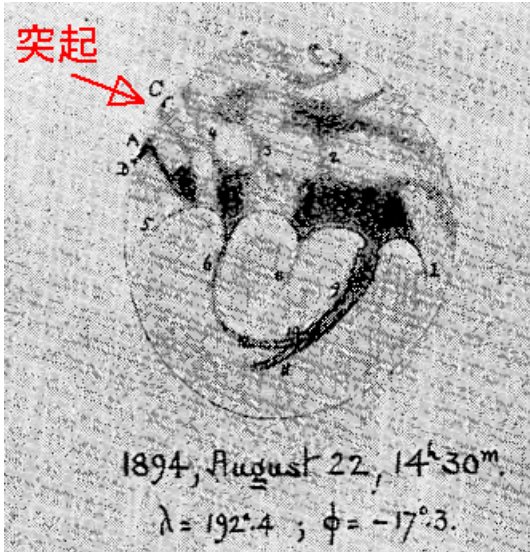


図5 リック天文台でのスケッチ(拡大) [4]

これが、「明るい突起 (bright projection)」と表現されたものである。

6. 終わりに

昨年の1月に、武漢でCOVID-19が発生したとき、H.G.ウェルズの『宇宙戦争』を読んでいた。「宇宙戦争の結末」が気になったからである。その際に、冒頭に出てくるネイチャー、1894年8月2日号の記事が作り話ではなく、実在することを知った。

そこで、インターネットで関連する文献を調べることにした。120年前の文献だったが関連する資料もインターネットで公開されていた。それらをまとめ、2020年12月5日の関東支部のオンライン例会で報告した。その発表資料に加筆し本稿とした。

参考文献

- [1] H・G・ウェルズ (1889) 『宇宙戦争』(斉藤伯好 訳, 2005), ハヤカワ文庫, p.29, 早川書房
- [2] 中村 融 (2005) 「ふたつの世界の戦いー『宇宙戦争』をめぐって」, 『宇宙戦争』創元SF文庫, p.315, 東京創元社
- [3] “A Strange Light on Mars”. *Nature* **50**, 319 (1894).
<https://doi.org/10.1038/050319c0>
- [4] E. S. Holden (1894) "BRIGHT PROJECTIONS AT THE TERMINATOR OF MARS", *Publications of the Astronomical Society of the Pacific*, **6**, Number 35 P.285.
- [5] W. W. Campbell (1894) "AN EXPLANATION OF THE BRIGHT PROJECTIONS OBSERVED ON THE TERMINATOR OF MARS", *Publications of the Astronomical Society of the Pacific*, **6**, Number 35 P.6
- [6] E.M.Antoniadi(1930), Patrick Moor 訳 (1975) "The planet Mars", P60-61



三品 利郎

* * * * *